JSiSE Research Report
vol.37,no.2(2022-7)

外部アセスメントテストを利用した学生の成長の可視化の一事例

鈴木大助[*1]
*1 北陸大学 経済経営学部

An Example of Visualization of Student Growth with an External Assessment Test

Daisuke Suzuki [*1]
*1 Faculty of Economics and Management, Hokuriku University

筆者の所属学部では，汎用的技能の育成を主たる目的とする汎用的技能科目群を含むカリキュラムを2019 年度から開始し，2022 年度に完成年度を迎えている．本稿では，汎用的能力の測定を目指して開発されたアセスメントテストである PROG の本学部における結果を用いて，学生の汎用的能力の成長について可視化を試みた．コンピテンシーを構成する力のうち，「親和力」「協働力」は 1 年次から比較的高いうえに，4 年次にかけてさらその力を伸ばしていた．また，1 年次から 4 年次にかけて，自信創出力，感情制御力，課題発見力，統率力を筆頭に，その他の力も軒並み右肩上がりで伸びていた．コロナ禍の影響で大学生の「協働力」「親和力」「統率力」と「行動持続力」が低下したという報道が見られたが，本学部の学生は，コロナ禍におけるオンライン授業期間を含む期間を通じてこれらの能力を伸ばしており，本学部としてはコンピテンシーを伸ばす教育を行うことができていると言える．

キーワード: 学修成果，教育成果，可視化，アセスメントテスト，教学マネジメント

1. はじめに

大学は，自律的な学修者を育成するため学修者本位の教育へと転換すること，その目的のために教学マネジメントを確立することが求められている．

教学マネジメント指針(1)では，DP・CP・AP の 3 つの方針の重要性を確認した上で，①DP（卒業認定・学位授与の方針）を具体的かつ明確に設定することで，学生の学修目標を明らかにするとともに卒業生の能力を保証すること，②明確な到達目標を有する個々の授業科目が学位プログラムを支える構造となるよう体系的・組織的に教育課程を編成・実施すること，③学生が自らの学修成果を自覚し説明できるようにするため，また DP の見直しを含む教育改善に資するため，学修成果・教育成果を多元的に把握・可視化すること等々が示されている．

学修成果・教育成果を把握・可視化するための手段のひとつとして，外部団体が開発するアセスメントテストを導入・実施する大学は少なくない(2)(3)．筆者の所属学部においては，PROG を導入し，毎年度全学年で実施している．PROG は，社会で求められる汎用的な能力・態度・志向を測定することを目指して開発されたアセスメントテストである(4)．

本学部は，マネジメント力を持った人材の養成を目的に掲げ，DP には，課題を発見する力や他者と協働して課題を解決する力といった汎用的技能の修得を含めている．また，汎用的技能の育成を主たる目的とする汎用的技能科目群を含むカリキュラムを 2019 年度から開始し，2022 年度に完成年度を迎えている．

本稿は，本学部が 2019 年度に開始したカリキュラムによって汎用的技能の育成という目的を現時点でどの程度達成できているのか，PROG の結果をもって把握・可視化することを目的とする．また，当該期間にはコロナ禍でオンライン授業となった期間が含まれており，この期間の影響についてもあわせて検討する．

2. アセスメントテストの概要と実施方法

2.1 アセスメントテストの概要

PROG では汎用的能力をリテラシーとコンピテンシーの２つの観点で測定する．リテラシーテストは選択問題 30 問に 45 分で解答することで，情報収集力，情報分析力，課題発見力，構想力の４つの力と，言語処理能力，非言語処理能力を測定する．リテラシーの総合評価は１～７の７段階で示される．また，リテラシーを構成する力はそれぞれ１～５の５段階で表される．なお，リテラシーは「新しい問題やこれまで経験のない問題に対して知識を活用して課題を解決する力」であるとしている．

コンピテンシーテストは，選択問題 195 問に 40 分で解答することで，対人基礎力，対自己基礎力，対課題基礎力を測定する．コンピテンシーの総合評価は１～７の７段階で示される．また，コンピテンシーを構成する力はそれぞれ１～７の７段階で表される．コンピテンシーは「周囲の状況に上手に対応するために身につけた意志決定の特性や行動スタイル」であるとしている．

2.2 実施方法

本学部における 2019 年度入学生に対する PROG の実施時期と実施方法について表 1 に示す．

表 1 PROG テストの実施時期と実施方法

年度	実施時期	実施方法
2019	4 月中旬	教室でペーパー受検
2020	7 月中旬	教室でペーパー受検
2021	4 月下旬	教室で Web 受検
2022	4 月下旬	教室で Web 受検

毎年度 4 月中下旬から 5 月上旬までに実施することを基本としているが，2020 年度はコロナ禍の影響を受け，7 月に実施することとなった．また，2020 年度まではペーパーベース検査であったが，2021 年度からはコンピュータベース検査へと移行した．いずれの方法にせよ，受検前の説明動画視聴や各自の解答準備等も含めると，100 分程度のまとまった時間を確保する必要がある．なお，一斉実施日に受検できなかった学生には予備日を案内して受検を促し，できるだけ多くの学生が受検できるように配慮している．また PROG 受検は各学年ゼミナールの授業の一環と位置づけ，ゼミナールとそれに続くキャリアデザイン科目の授業時間を利用して実施している．

3. 結果と考察

2019 年度入学生のうち，2022 年度まで PROG を毎年度受検し，リテラシー・コンピテンシーともスコアが得られた 217 人に関して，その統計処理後の結果を示す．まず，2019 年度入学生のリテラシーの平均とコンピテンシーの平均について，学年進行に伴う推移を図 1 に示す．

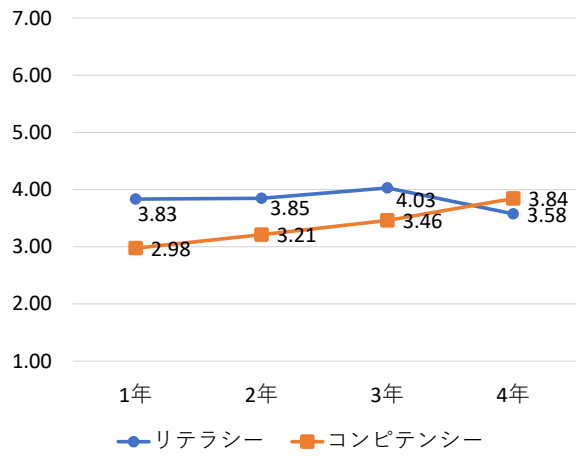

図 1 2019 年度入学生のリテラシーの平均とコンピテンシーの平均の推移

リテラシーは 3 年次がピークとなっているが，コンピテンシーは入学当初から 4 年次にかけて着実に向上している．なお，スコアの推移に基づいて学修成果・教育成果を評価するためには，全国平均の推移等の基準が必要であるが，原稿執筆時点では入手できていない．特にリテラシーテストは年度毎の難易度が一定でない可能性を考慮すると，なおのこと全国平均の推移が基準として必要であるため，リテラシースコアの検討については稿を改めたい．

コンピテンシーの推移については報道による公開情報(5)が比較の基準として利用できるため，本稿ではコンピテンシーのスコアについて以下検討する．

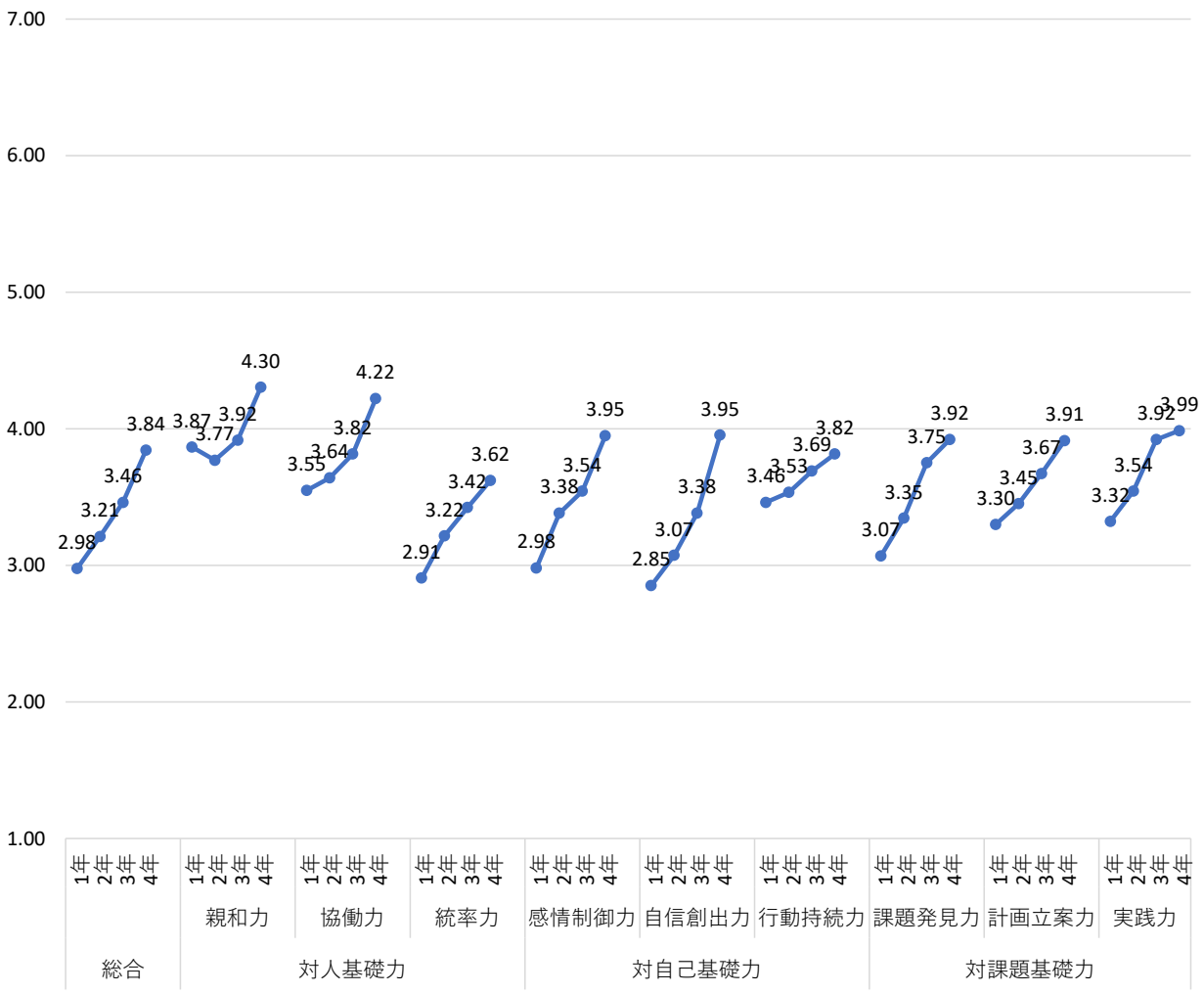

図 2 コンピテンシーを構成する力の平均の推移

本学部の 2019 年度入学生の学年進行に伴う，コンピテンシーを構成する力の平均の推移を図 2 に示す．項目別に 1 年次から 4 年次までのスコアの推移を並べており，一番左の折れ線はコンピテンシー総合の推移，続く 3 つの折れ線は対人基礎力を構成する親和力，協働力，統率力の推移，中ほどの 3 つの折れ線は対自己基礎力を構成する感情制御力，自信創出力，行動持続力の推移，右の 3 つの折れ線は対課題基礎力を構成する課題発見力，計画立案力，実践力の推移を表している．縦軸は各力のスコアである．

ほぼすべての項目で，1 年次から 4 年次にかけて右肩あがりに推移している．報道(5)によると「親和力」「協働力」「統率力」は，他の人と信頼を築きチームとして動くために必要な力であり，社会に出て仕事をする際に必要度が高い能力であるとしている．本学部の結果を見ると，「親和力」「協働力」は 1 年次から比較的高いうえに，4 年次にかけてさらに伸びていることがわかる．

また，1 年次から 4 年次に欠けて伸び幅が大きい力として，自信創出力（2.85 から 3.95 へ 1.10 ポイント上昇），感情制御力（2.98 から 3.95 へ 0.97 ポイント上昇），課題発見力（3.07 から 3.92 へ 0.85 ポイント上昇），統率力（2.91 から 3.62 へ 0.71 ポイント上昇）が挙げられる．

以上から本学部における学修や大学生活を通じて，入学時点から比較的高かった親和力・協働力を始めとする対人基礎力についてはさらにその力を向上させながら，対自己基礎力・対課題基礎力についても着実に伸ばしている様子が読み取れる．

ただし，これらの伸びが特に本学部における学修や大学生活に起因するものであるのか，それとも全国の大学生に見られる一般的な傾向であるのかについて検討しなければならない．そこで，報道(5)を通じて知ることができる，2019 年度入学生約 2 万人のコンピテンシー平均値の 1 年次から 3 年次への変化を基準として比較・検討する．

報道によると，2020 年初からのコロナ禍の影響で 3 年生の時の「協働力」「親和力」「統率力」と「行動持続力」が，1 年生の時より低下したということであった．曰く，2019 年度入学生は 2 年生になった 2020 年度にコロナ禍に見舞われ，オンライン授業が増え，グループで議論して成果を発表する機会が減るなどした影響が出ているのではないかという問題提起であった．

これをふまえ，本学部の 2019 年度入学生に関して，コンピテンシーを構成する各能力の 1 年次から 3 年次にかけての平均値の変化を図 3 に示す．

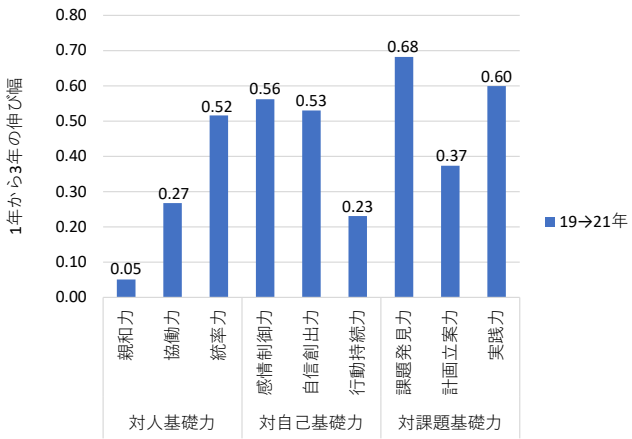

図 3 2019 年度入学生のコンピテンシー各能力の 1 年次から 3 年次にかけての平均値の変化

本学部においては，2020 年のコロナ禍におけるオンライン授業期間を含む期間を経て，「協働力」「親和力」「統率力」と「行動持続力」を含むすべての能力が伸びていることがわかる．

変化量を比較すると，19 から 21 年にかけて全国では行動持続力が 0.1 ポイント程度低下，親和力・協働力・統率力も 0.05 ポイントから 0.1 ポイント程度低下しているのに対し，本学部では行動持続力は 0.23 ポイントの上昇，親和力・協働力・統率力はそれぞれ，0.05 ポイント，0.27 ポイント，0.52 ポイント上昇している．

課題発見力や計画立案力，実践力に関しても，全国平均では 0.1 ポイントから 0.2 ポイント超程度の上昇であるが，本学部では課題発見力が 0.68 ポイント，計画立案力が 0.37 ポイント，実践力が 0.60 ポイン上昇しており，全国平均を大きく上回る上昇幅である．

結果を単純に解釈するならば，コロナ禍におけるオンライン授業期間を含む期間を通じて，本学部の学生はこれらの能力を十分に伸ばしており，本学部としてはコンピテンシーを伸ばす教育を行うことができていると言える．各学年で開講される必修のゼミナールとそれに続くキャリアデザイン科目では，オンライン授業期間であっても，Teams を利用して，グループワークを行ったり，学生同士が議論したりお互いに発表したりする機会を設けており，こうした取組みが対人基礎力等を伸長する効果をもたらした可能性がある．

4. 制限事項

本稿ではリテラシーテストのスコアを分析の対象外とした．スコアの推移に基づいて成長の程度を測定するためには各年度の全国平均等の基準が必要であるが，本稿執筆時点で入手できていないためである．リテラシーテストの難易度が毎年度一定であることが保証されているのであれば，その変化量に基づいて成長の程度を考察できる．しかし，難易度が一定でない可能性があるのであれば，少なくとも全国平均の推移等を基準として，それとの比較に基づいて学習成果・教育成果を評価する必要がある．

コンピテンシーテストのスコアについては，2019 年度から 2021 年度にかけてのおおよその平均値の変化量を報道から知り得たため，これを基準として評価した．ただし，知り得たのは平均値の変化量のみであり，各年度の平均値それ自体ではない．元のスコアによって伸び代が異なるため，単純に変化量だけに基づいて考察している点には留意が必要である．

今回は PROG のスコアのみに基づいて学修成果の把握・可視化を試みたが，さらに複数の情報を用いて多元的な評価を行う必要がある．学生は毎年度の PROG の結果返却時にふりかえりを行い，どのような経験を通じてどの力が伸びたのか，また今後何を伸ばしていきたいか等を記述している．そのほかにも，毎年度本学の DP をふまえたルーブリックを用いて自身の達成度を自己評価している．教育成果・学習成果の把握にあたっては，このような間接評価もあわせて検討する必要がある．さらに直接評価としては，外部アセスメントテストの結果と本学部で開講している汎用的技能科目の成績をあわせて検討する必要がある．

5. おわりに

筆者の所属学部では，汎用的技能の育成を主たる目的とする汎用的技能科目群を含むカリキュラムを2019 年度から開始し，2022 年度に完成年度を迎えている．汎用的能力の測定を目指して開発されたアセスメントテストである PROG の本学部における結果を用いて学生の汎用的能力の成長について可視化を試みた．コンピテンシーを構成する力のうち，「親和力」「協働力」は 1 年次から比較的高いうえに，4 年次にかけてさらその力を伸ばしていた．

また，1 年次から 4 年次にかけて，自信創出力，感情制御力，課題発見力，統率力を筆頭に，その他の力も軒並み右肩上がりで伸びていた．報道によると，コロナ禍の影響で大学生の「協働力」「親和力」「統率力」と「行動持続力」が低下したということであったが，本学部の学生は，コロナ禍におけるオンライン授業期間を含む期間を通じてこれらの能力を伸ばしており，本学部としてはコンピテンシーを伸ばす教育を実現できていると言える．

なお，本稿の議論は限られた情報に基づいている．本稿における議論の制限事項については制限事項の章を参照されたい．さらに，多元的な評価を行うことは今後の課題である．

参 考 文 献

(1) 文部科学省 中央教育審議会大学分科会: “教学マネジメント指針”, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360_00001.html (2022 年 6 月 20 日確認)

(2) 文部科学省: “大学教育改革の実態の把握及び分析等に関する調査研究”, https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/1347633.htm (2022 年 6 月 20 日確認)

(3) ハーモニープラス株式会社: “【学修成果の可視化は必須だがその方法が分からない！？】大学教職員 1,022 人への調査で見えてきた「教学マネジメントの確立に向けた取組と課題」とは？”, https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000001.000081844.html (2022 年 6 月 20 日確認)

(4) RIASEC: “PROG テストについて”, https://www.riasec.co.jp/progtest/test/ (2022 年 6 月 20 日確認)

(5) 朝日新聞デジタル: “コロナ禍で大学生の「協働力」など低下　一方で伸びた能力は…”, https://www.asahi.com/articles/ASQ2J3TBTQ2GUSPT00K.html (2022 年 6 月 20 日確認)